魔法少女リリカルなのは モルモットから始まります

愛紗Love

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　モルモットから始まります

【Ｎコード】
Ｎ６６４１Ｍ

【作者名】
愛紗Ｌｏｖｅ

【あらすじ】
リリカルなのはの世界に転生ヤッフゥ～！っと思ってたけど何？これ！？なんで俺モルモット！？研究所から始まる俺の転生物語

プロローグ（前書き）

リリカルなのはシリーズ見て書きたくなりました

プロローグ

貴方は、転生を信じますか？

はい、信じます！

てな訳で俺転生しますたｗｗｗｗ

いきなり白い部屋に来たとおもったら神様が「暇だからお前転生させてやる」って言ってきたから「末永くよろしくお願いします！」って言って転生させてもらいましたｗｗｗｗ

ちなみに能力も三つ貰ったよ！ネギま！の魔法が使えるようにと王の財宝と魔力いっぱい、そして１番大事な転生場所はリリカルなのはにしました幼女なのは可愛いし

でもここまではよかったけど・・・・

研究員「１８番早く行け！」

１８「あいあい」

なんかよくわからない研究所みたいな場所でモルモットになってますｗｗｗｗ

いや、笑い事じゃなくて

魔法使って逃げればいいじゃんって？無理だって俺前世でオタクだよ？

いきなり魔力あげるって言われて使えるとでも？やり方マジ意味わかめ

まぁたしかに頭の中で中二病的な事ばっか考えてたけどさ、かめはめ波を真顔でやったりとか、でもしょせん頭の中で考えてたってだけだからな

１８「（ホントになんとかしないとな）」

とりあえず転生しました

プロローグ（後書き）

・・・・・続けられるかな

1話（前書き）

短いっす

1話

ども、１８番です

別に前世の名前があるからそれを使えばいいんだけど転生したんだから今までの名前じゃなくて新しい名前が欲しいからさ、まぁまだ決まってないけど

今は研究所にあるモルモット、つまり俺達の部屋？みたいな場所に居ます

５番「はー君、暇だね」

ちなみにはー君と言うのは俺のあだ名らしい１８の８の部分を延ばしただけの単純なもの

１８番「ごー君今までで暇じゃなかった事あったか？」

５だからごーです

５番「ないね・・・・はー君、何かお話聞かせてよ」

１８番「やだよ、面倒臭いそれに最近は話を忘れてきたし」

お話は単に暇だったからアニメの話を聞かせてた

９番「いいじゃない、それで気が紛れるんなら」

１８番「くーちゃん達は聞いてるだけでいいかも知れないけどこっ

ちはずっと喋ってないといけないんだよ？口が疲れるの」

一応この研究所にも女の子がいるこの子は９番だからくーちゃん

５番「お願い！はー君」

１８番「ん～・・・しかたない、良かろう！聞かせてしんぜよう」

いや、ね？なんだか母性本能をくすぐられてね？いちよこっちは精神年齢がそこそこのオッサンなんで

１８番「ならとある騎士王の話をしてあげよう」

もちろん話すのはＦａｔｅ　／　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔです

――――３０分後

１８番（セイバー役）「最後に、一つだけ伝えないと」

１８番（シロウ役）「・・・・・・ああ、どんな？」

１８番（セイバー役）「シロウ――――貴方を、愛している」

１８番「はい、お話終了！」

大変だった一人で全部の役をやるのは、とくにイリヤの役がすっごい恥ずかしかった

５番「グスッ・・なんで一緒に居ないで帰っちゃうんだよ」

９番「ホントよ・・・・ヒック・・・好きなら一緒にいればいいのに」

二人とも感動してる・・・・・・でもイリヤの役をやった時の俺を笑った時は一瞬殺意が沸いたぞ☆

１８番「まぁとにかくもう、今日は寝よ」

寝よと言っても毛布が人数分あるだけだけど

１８・５・９「「「おやすみ」」」

最近はこんな毎日だ

―――朝

研究員「朝飯だ」

つってもサプリメントだけど、まともな食事があるのは夕食だけ

パク

１８番「・・・・・慣れてる自分がいやだ」

９番「？、別に普通でしょ」

たしかにあんたらはずっとサプリメントを食べるのが普通だもんね、あぁ～マック食べたい～現代っ子なめんなよ

５番「はー君、くーちゃん、第２研究室に集まれだって」

――――第２研究室

研究員「呼ばれるまで此処で遊んでろ」

そう言って部屋をでていった

１８番「・・・・・・遊んでろって何もないけど・・・何をしろと？」

此処には真っ白な壁しかない

９番「しかし・・・・こんなに居たのね」

確かに５才くらいの子供が俺達を入れて３０人くらい居る

５番「何があるんだろうね？はー君」

１８番「とりあえず楽しい事じゃないだろうな」

放送「５番！隣の部屋に来い」

５番「じゃ、行ってくるね」

ごー君が行った

９番「・・・・いつまでこんな所にいなきゃいけないんだろうね」

１８番「ホントだよ、そろそろ原作キャラに会いたいのに」

９番「原作・・・キャラ？」１８番「気にするな！こっちの話だから」

その日俺達は呼ばれる事はなかったけど、ごー君が帰って来なかった

――――部屋

９番「・・・・・ごー君・・・・どうしたんだろ」

１８番「・・・・・・・・・・」

９番「はー君・・・・」

１８番「・・・寝よ、どうせ俺達に出来る事なんてないんだし」

９番「・・・・・・うん」

・・・・・・寝たか

１８番「・・・・くーちゃん・・・・・ちょっと行ってくる」

最近になってやっと王の財宝が使えるようになったんだよね

でもまだ王の財宝から武器を一つ取るくらいの事しか出来ないんだよね、まだ魔力の使い方とかよくわからなくて無理に王の財宝を使おうとすると暴走してしまうし

１８番「・・・王の財宝・・・・・干将・莫耶」

王の財宝から出したのは干将・莫耶

１８番「いざ行かん！・・・・・・・・」

バタン

９番「・・・・・・・・・気をつけてね」

――――第２研究室の隣の部屋

１８番「たしか此処だよな・・・・・・・なんもない」

よくわからない機械があるだけでごー君はいない

１８番「・・・・いまさらだけど見つかったらやばいよ「お前！此処で何をしている！」くそぅ～フラグだったか！」

研究員「何をしているかと聞いている」

どうやら暗いおかげで干将・莫耶は見えていないらしい

１８番「・・・ごー・・・５番はどこにいるかわかりますか？」

研究員「５番？・・・あぁ成功作か」

１８番「成功作？・・・どういう事ですか」

研究員「言葉のとおり成功作だ、今頃本部にでも連れて行かれてるだろ」

とりあえず殺されたとかじゃなくてよかった

研究員「まぁお前らも不敏だよな？“破棄“されるんだから」

１８番「え？・・・・破棄？なんで？」

研究員「当たり前だろ、成功作が出たんだもうお前達は要らない」

１８番「・・・は？何？・・・じゃああんたらは勝手に作っといて残りの子供達を殺すって事か？」

研究員「あぁもうお前らはいらな「ブシャ！」・・・・は？」

気がついたら研究員の腹を刺していた

１８番「はぁ、はぁ、はぁ・・・・あんたは絶対に地獄行きだな」

気持ち悪い・・・・人を刺した感触がまだ手に残ってる

１８番「・・・・・そうだ、早く逃げないと・・・くーちゃん連れて」

くーちゃんの居る部屋に急いで戻った

バン！

１８番「くーちゃん！・・・・あれ？居ない・・・・なんで？」

居ない何故だ？

ブーーーーーー！！！

１８番「何！？このメタ〇ギア並の警報は！・・・・・まさか俺ばれた？」

研究員「居たぞ！！」

１８番「チッ！・・・くーちゃんごめん！」

俺は逃げる事にした

2話（前書き）

短い

2話

おはよう、１８番です

あの後何とか逃げられたけど此処が何処かがわからない・・・・・・

ようこそサバイバル

研究所からとにかく離れようと思ったらよくわからない森に来てしまった

１８番「・・・・つか今思ったけど此処日本かな？地球かな？」

ちょっとひぐらし風に言ってみた

１８番「・・・・・そだ！跳べばいいんだ！えぇ～っと・・・王の財宝・・・杖っと」

出したのはネギま！のネギが持ってる杖

１８番「よし、跳べ！・・・・・・・・・・・・」

何も起こらない

１８番「・・・・・あっ俺まだ魔法使えないじゃん」

最悪だ・・・・てか死んだ・・・・俺

１８番「・・・くーちゃん、はー君、どうやら俺はここで終わりのようです・・・・・最後に翠屋でなのはを見たかった」

ガクッ

俺は疲れて眠ってしまった

??「ん?なんだい、この子は?・・・・・・・見てしまったからな・・・しかたない、連れて帰るか」

――――朝

18番「・・・・・・ハッ!・・・・・ネタが浮かばない・・・・・・・クソッ!ネタが浮かばないなんて芸人失格じゃないか!!」

そんな絶望感を感じながらある事に気付いた

18番「あれ、ここどこ?・・・・まさかまた研究所に逆戻りか!」

っと考えたがどう見ても普通の部屋だった

ガチャ

??「あぁ、目が覚めたか」

18番「あっはい、あの何で俺は此処に?」

??「いや、ただ森の方を歩いていたら君が寝ていたから部屋まで連れてきたんだ」

18番「あっそれはご丁寧にありがとうございます」

??「なに、それより君の格好はなんだ?裸足で病院の患者が着るような服を着て・・・・・病院を抜け出してきたのか?」

18番「あぁ〜・・・・信じてもらえないかもしれないですけど俺さっきまでモルモットだったんですよ」

俺は自分が居た状況を話した

??「ほ〜、またそんな事があったのか」

18番「えぇ、まぁ・・・あの、名前を聞いても」

??「あぁまだ言ってなかったな、私はニル=ファーム、君は?」

18番「あっ俺は18番って呼ばれてました、仲間には、はー君って呼ばれてました」

ニル「ちゃんとした名前はないのか？」

１８番「まぁ生まれた時から番号で呼ばれてましたから」

ニル「そうか、なら私の性をやろう、無よりあるほうがいいだろ？」

１８番「え？いいんですか？」

ニル「あぁ、別に構わない。あと名前は自分できめろよ・・・・そうだ、腹が減っただろ？今朝食を持ってきてやる」

そう言うと部屋を出ていった

１８番「何だか初めて人の優しさに会ったきがする・・・・・そうだ！名前決めよ、せっかく性を貰ったんだから」

と言ってもいきなり名前と言ってもなぁ～

１８番「・・・・はー君だからとりあえず、『はー』は入れたよな・・・・ごー君・・・・ハーゴ・・・なんかやだな・・・・くーちゃん・・・ハーク・・なんかカッコイイな、よし！これにしよ」

てな訳でハーク＝ファームに決定しました！

ガチャ

ニル「持ってきたぞ」

ハー「あっありがとうございます、ニルさん、俺の名前ハークにし

ました」

ニル「いいんじゃないか？さぁ食べろ」

出てきたのはコンビニ弁当だった

ハー「・・・・たまたま今日はコンビニ弁当を食べる日だったんですよ「いや、毎日それだが？」・・・ニルさん、俺に料理をさせてください」

実は俺前世で料理関係の仕事をしてたから食事についてはこだわりがある訳で

ニル「だが食材自体ないぞ？」

ハー「なんとぉ！？」

ニル「・・・・・・！・・君、家で住み込の仕事をしてくれないか？料理を朝、昼、晩と作ってくれるだけでいいんだ」

ハー「え？あの・・・・いいんですか？」

ニル「あぁ、それにこの家は一人で住むのには広いのでな」

ハー「じゃ、じゃあよろしくお願いします！」

こうして俺はニルさんの家に住む事になった

ハー「ちなみに此処って何処ですか？」

ニル「ミッドチルダだが？」

なっなんだって！！なら俺は幼女なのはや幼女フェイトに会えないのか！

ニル「だが、四年後に“地球“に引越しするつもりなんだ」

ハー「ナイス！ご都合主義！」

なんてステキなご都合主義！ハハハッ待ってろよ！鳴海！待ってろよ幼女達！

2話（後書き）

ご都合主義でサーセンwwww

3話

ニルさん家で仕事をする事になったハーク＝ファームです！

いや、いいね！名前があるって今まで１８番です！って言ってたから何だか中二病みたいで恥ずかしかったんだよね

ハー「ニルさん、タマゴ焼きは甘いのか辛いのどっちがいいですか？」

ニル「タマゴ焼きが甘いくなるのか、なら甘いので」

ハー「はい」

・・・・何だか新婚さんみたいじゃないか、まぁ本来は立ち位地が逆なのは置いといて

ニル「なんだかこうしてると・・・・」

こうしてると！？

ニル「・・・・子供に料理を作らせてる駄目な両親みたいだな」

そうでした、俺今五才だった・・・・中身オッサンだけどｗｗｗ

ニル「あぁ、今日は少し遅くなるかもしれないから晩御飯は要らないぞ」

何でもニルさんはデバイスの研究やロストギアの研究をしてるらしい

ハー「最近多いですね」

ニル「あぁ、四年後には地球で隠居生活をしようと思っているからな、そのための努力なら何たってするさ」

ニルさんは基本面倒臭がりあです

ハー「そうですか。はい、出来ましたよ、そしてこっちがお弁当です食べちゃだめですよ」

ニル「あぁ、わかっているよ」

ハー「それじゃ俺、そろそろ行ってきます」

ニル「頑張ってくれたまえ」

最近は来るべき原作介入に向けて魔法の特訓中なのですよ！

―――森

俺が倒れてた場所とは違う場所の森だよ？

ハー「じゃ～まずは・・・王の財宝・・・杖」

取り出したのはネギが持ってる杖じゃなくて初心者向けの杖である

ハー「あっ、あと魔法書」

王の財宝に何が入ってるか見てると魔法書なる物があったので使わせて貰ってる・・・・ネギま！の魔法とかが載ってる凄い本なのだ！！

ハー「・・・・・集中・・・・集中・・・・集中・・・・プラクテ・ビキナル・火よ灯れ（アールデスカット）」

ボウッ

かなり集中してやっと一つの魔法が出来ます（泣）

まぁ神様に魔力いっぱいって言ったから何時間しててもつかれないけどねwwwww

ハー「よし、次だ・・・・・・・・プラクテ・ビキナル・魔法の射手・雷の一矢（サギタ・マギカ　ウナフルグラリース）」

ビュン！

ハー「ハハハハ！出来たぞ！一本だけだけど！ハハハッワロスwww・・・・・・・・・地味だ」

なんだこれは！！今の所俺、タマゴ焼き作ってライター並の火を出してよろこんでるぅ！しかも一人で！

ハー「・・・・仲間が欲しいな」

一人じゃ限界あるんさね

ハー「・・・・・・・あっでも最後に・・・・・・・・・プラクテ・ビキナル・火よ灯れ（アールデスカット）」

ボウ！

・・・・・・・いや、なんだかホントに魔法が使えるんだなっと思ったらついしたくなって

――夜

ニル「ただいま・・・・・・・・どうしたんだい？」

ハー「独り身のつらさを感じてた所です」

ニル「そうかい・・・・あぁやっぱり晩御飯を作ってくれないか？」

ハー「はひ・・・・・」

ハンバーグを作りました

ニル「あむ・・・・あむ・・・・・」

ハー「・・・・・ニルさん」

ニル「なんだい？・・・・・あむ・・」

ハー「その・・・・・デバイスって余ってないですか？」

ニル「・・・いきなりどうしたんだい？」

食べるのをやめて聞いてきた

ハー「えぇ～その、一人じゃ淋しいなぁ～っと」

ニル「・・・・まぁ大丈夫だろ、インテリジェントデバイスでいいか？」

ハー「はい！」

デバイスＧｅｔだぜ！

――――翌日

ニル「ほら、これが君のデバイスだ」

真ん中に緑色の宝石がある腕輪だった

デバ「・・・・マスター・・・・名前を」

ハー「（やっべ！腕輪が喋ってるｗｗｗｗ）・・・あ～名前ね？えぇ～・・・・『イフ』、お前イフ」

イフ「・・・・バリアジャケットを・・・・イメージしてください」

ハー「（バリアジャケットって戦闘服って事だよな？・・・・・戦闘服って言ったらあれだろ）」

イフ「・・・・Ｓｅｔ　ｕｐ」

ピカァー！

ハー「・・・・・おぉ～クラウドだ」

イメージしたのはアドベンドチルドレンの時のクラウドの服

ハー「ホントにカッコイイな～」

ニル「・・・・君はナルシストなの「違います！」・・・そうか」

ハー「まぁとにかく・・・・・少し行ってきます」

ニル「あぁ、行ってくるといい」

―――森

ハー「よし！じゃあさっそく、練習始めますか！」

イフ「・・・・・・・・」

ハー「・・・・気にならない？何を練習しるのか？」

イフ「・・・・・別に・・・・」

ハー「・・・・・ええっと・・・・無口なんだね」

イフ「・・・・それなりに」

なんだかイフと楽しい人間関係を築いていけそうに・・・・・・・
デバイスとでも人間関係って言うのかな？

ハー「まぁとにかくやろ・・・・・・・・・・・・・・プラクテ・ビキナル・魔法の射手　収束・雷の三矢（サギタ・マギカ　コンウエルゲンティア・フルグラリース）」

シュン！シュン！シュ～ン

イフ「！！？」

ハー「三本目が変な感じになっちった「・・・・今のなんですか？」お！興味もってくれた？」

イフ「・・・・それなりに・・・・・・私を使わずにどうやって今のを？」

『私を使わず』にってなんだかエロいな

ハー「えぇ～・・・宇宙にある何かが何かで「・・・もういいです、わかりせんでしたけどマスターの事はわかりました」・・・うん、わかってもらえてうれしいよ」

溝は深まるばかりだ

3話（後書き）

早くなのは達に会いに行きたい

4話（前書き）

意見があったので

台詞の前に名前を書くのやめました

4話

どうも～ハークです

あれから・・・・・四年たちますたｗｗｗ・・・・・ごめんなさい！修業風景って何を書けばいいのかわからなくて！

「・・・・よし！ニルさん！荷物運び終わりました」

「あぁ、すまない」

今やっと車に荷物を積み終わった所だ

［・・・・時間掛かりすぎ・・・・馬鹿］

「うっ！簡単に人を罵倒するのは人として駄目な気がするな！」

［・・・なら私は大丈夫・・・・・デバイスだから］

最近は昔みたいに無視するだけじゃなくてツッコミをしてくれます・・・・・毒舌だけど

「・・・・・とにかく！ニルさん、空港に行きましょう！」

――――空港

「ニルさん、時間大丈夫なんですか？のんびり缶コーヒー飲んでま

すけど？」

空港に来るまでに渋滞に二回もはまったし

「あ～・・・・後三分で出発だ」

「・・・・・・・・・」

「大変だな」

そう言ってまたコーヒーを一口

「大変だな、じゃないですよ！早く行きますよ！」

ニルさんの腕を取って走った

「もう！なんでそんなに落ち着いていられるんですか！！」

「・・・性格ってのは二十歳までに決まってしまうらしい、それから性格を直すのは難しいらしい」

「性格だからしかたないってか！！」

「・・・・五月蝿い」

ちくそう！皆で俺をいじめるのか！

「はぁはぁ、自分で走ってください！」

「いや、多分私の足では間に合わないから」

「9才の子供にさせる事か！・・・・・・ん？」

前方に黒服を着た男達がいる

「（ヤクザか何かか？・・・・・いや、黒服の男達の間に子供が・・・・あぁ、ＳＰか！）」

「（って事はあの子供はどっかのお坊ちゃんって事か！ブルジョアめ！！・・・あっ！目あった）」

ＳＰに囲まれてる子供がこっちを見た

俺は何故かそいつから目が離せなかった

「君、そろそろ早く行かないと間に合わないよ？」

ニルさんが言ってきた

「おふっ！やっべ！行きます！」

俺は急いだ

―――Ｓｉｄｅ　黒服に囲まれてた子供

「・・・・・・・・」

「おい！何さっきからボーっとしてるんだ！早く動け」

「あっはい、行きます・・・・・・・」

――――地球

「・・・・・・着きましたね」

「着いたな」

・・・・・・一言だけ言わせて・・・・・・ニルさん面倒臭い！

だって常に急ごうとしないんだもん！危うく寝過ごす事になりかけたよ！

「・・・・・・そうだ、家って何処ですか？」

「あぁ～・・・・・確かあの一際大きいマンションだ」

そう指差したのは原作でフェイトが住んでるであろう場所だった

「・・・・・テンプレ乙・・・・・」

喜んでいいのかよくないのかわからないよぉ～（泣）

「あっそうだ、今年から君にも学校に通ってもらおうと思ってるんだ、確かぁ～・・・私立聖祥大附属小学校だったと思う？」

「・・・・・テンプレ～（泣）」

助けて～ドザエモ～ン（泣）

「まぁとにかく家に入ろう」

「・・・・はい」

――――翌日

「あの、ニルさん・・・・準備早くないですか？」

「別に普通だろう？」

何でも今日から登校だそうです

「・・・・・・行ってきます」

「いってらっしゃい」

ガチャ

バタン

「は～・・・ハーク＝ファームの憂鬱「ドン」おふっ！」

「あっ・・・ごめんなさい・・・急いでますから」

少女Ｆは去っていった

「・・・学校行こ」

――――学校

「それじゃあ、呼んだら教室に入って来てね」

「はい」

緊張してきたぁ～

「・・・・・イフ・・・・小意気なアメリカンジョークを」

「・・・・マスター・・・・小意気なアメリカンジョークを」

「返された！・・・・・ジョニーが僕にこう言ったのさ！お前は「ハーク君！入ってきて」・・・・はぁ～い」

すべる前に呼ばれてよかった

ガラガラ

「えぇ～ハーク＝ファームです、海外から来ました、よろしく」

・・・こんなものでいいのか？

「じゃあハーク君は1番後ろの窓際の席で」

「あい、」

・・・・・しかし、やっぱり居るのね、魔王と吸血鬼とツンデレが

――――昼休み

「何処から来たの？」

「目緑色だね！」

「昨日のテレビ見た？」

面白いくらい質問攻めｗｗｗさぁツンデレさんよ！俺を助けて「バン！！！」・・・・ん？

「いい加減にしなさいよ！」

「（え？何？俺何かした？）」

「こないだっから何話しても上の空で！ボーっとして！」

「あっうん、ごめんねアリサちゃん」

「（・・・・マジで！？今６話なの！何もこんな微妙な時に介入しなくても！）」

「ごめん、じゃない！私達と話してんのがそんなに退屈なら一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！行くよすずか！」

「あっアリサちゃん・・・・・・なのはちゃん」

「いいよ、すずかちゃん今のはなのはが悪かったから」

「そんな事ないと思うけど、とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ、少し話してくるね」

「ごめんね」

「（・・・・シリアスだ・・・・・・なのに俺さっきまでアメリカンジョークとか言って・・・・・・最低だ！俺！）」

「どうしたの？ハーク君、涙流して」

「・・・・自分の愚かさに涙がね」

――放課後

「それじゃあね、なのはちゃん」

そう言うと吸血鬼とツンデレが去っていった

「（・・・・・やばい、教室に今俺と魔王しかいない・・・・しかも魔王マジブルー）」

なんかやだ・・・・・・・・帰ろう！魔王を無視して帰ろう！どうせ今日介入するし

弱気な主人公だった

――夜

「よし！それでは！人生初の！原作介入と行きますか！イフ！Ｓｅｔ　ｕｐ！」

『・・・・・Ｓｅｔ　ｕｐ』

ピカー

「ふぅ～・・・・変身の時の効果音が気になるけど・・・・行きます「君、どうしたんだい？こんな時間に？」っあ！ニルさん、俺今からちょっと行ってきます」

「あぁ～少し待ってくれないか？今シチューを作ろうとしたんだが上手くいかなくてな」

「っえ！？・・・・・・・はい、わかりました」

今日は介入するのやめました

4話（後書き）

大丈夫でしたか？

5話（前書き）

今までより少し長め

5話

どうも、ハークです

昨日は結局シチューの事で頭がいっぱいになり原作介入できませんでした

「いや、よかったのかもしれないな、何も考えずに原作介入するつもりだったし・・・・どうやって介入しようか」

ん～どう介入したらいいものか・・・・・あっ！正体を隠すなんていいんじゃね？そうだよ！それに俺にはあの“仮面“があるじゃないか！

「やっべwwww超楽しみwwww」

［・・・・黙っください・・・・・マスター？］

「マスターの所でハテナを使わないでくださいイフさん」

――――学校

やんややんや

――――学校終了

「駄目だ、介入が楽しみ過ぎて学校で何したか覚えてねぇ・・・・・・まぁいいや、とにかく！原作介入！」

俺は急いで現場に向かった

「グォォォォォォ！！」

ドラクエに出てきそうな木のお化けが暴れてる

シュンシュンシュン

あっ我らがフェイトが何かを撃ったけどバリアで防がれた

「うぉ～生意気にバリアまで張るのかい」

「今までのより強いね、それにあの子も居る」

・・・・今が出るチャンスじゃね？よし！カッコよくあの化け物を倒して・・・・っとその前に“仮面“を付けてっと・・・・行くぜ！

「・・・・・・・プラクテ・ビギナル・魔法の射手・連弾・雷の１７矢（サギタ・マギカ・セリエス・フルグラリース）」

フフッフ、さぁ原作介入の時間だよｗｗｗｗ

―――Ｓｉｄｅなのは

ジュエルシードが暴走して木の化け物になっていた

そしてフェイトちゃんも来ていた

「うぉ～生意気にバリアまで張るのかい」

「今までのより強いね、それにあの子も居る」

私を睨みようにフェイトちゃんが見てきた

「ユーノ君！逃げ「プラクテ・ビギナル・魔法の射手・連弾・雷の１７矢（サギタ・マギカ・セリエス・フルグラリース）」へ？」

急に何処からともなく矢が飛んできた

キンッ！

「ん～やっぱりバリアで塞がれたか、まぁいいまだ手はある」

・・・・・・・・へ？急に蝶の仮面を付けた男の子が出てきた

「あっあの～だっ誰ですか？」

此処に居る皆を代表して聞いてみた

「よし！教えてあげよう・・・・・可憐な花に誘われて！美々しき蝶が今、舞い降りる！我が名は華蝶仮面！混乱の都に美と愛をもたらす正義の化身なり！」

ドカーン！

何故か頭の中でそんな効果音が聞こえた気がしたの

「あっあの、貴方もジュエルシードを狙ってるんですか？」

フェイトちゃんが質問した

「いや、言ったでしょ？俺は美と愛の正義の華蝶仮面だ！それ以上でもそれ以下でもない！故に！その木の化け物は俺が倒してやろう！」

そう言うと華蝶仮面さん？は木の化け物に向かい合った

―――Ｓｉｄｅ　ハーク

さぁ～て、どうやって潰してくれようか

「ん～とりあえず、数打ちゃ当たるっと・・・・プラクテ・ビギナル・魔法の射手　連弾・火の５９矢（サギタ・マギカ　セリエス　イグニス）！」

俺は５９本の火の矢を木の化け物に撃った

「グォァァァァァ！！！」

例の如くバリアを貼ったけど４０本当たったあたりでバリアが壊れて木の化け物に１９本が木の化け物に刺さった

「あっれぇ～？大丈夫？木に火はマズかったかな？ハハハハ！！」

やっべｗｗｗｗ木が萌えてるっあ間違えた木が燃えてるｗｗｗｗ

ふとなのは達を見たら顔が青くなってた

「（・・・・・やり過ぎた！美少女の前でやり過ぎた！！）・・・・・

あ～、あの、木の化け物死んだんで後は自由に」

そう言って近くのベンチに座った

［・・・・・鬼畜・・］

「・・・・五月蝿い馬鹿」

「えっとじゃあ、ジュエルシードには衝撃をあたえたらいけないみたいだ」

「うん、ゆうべみたいな事になったら私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だもんね」

さっきまでにないくらいシリアスだ、そう、さっきの事をなかった事にしようとしてるみたいに

「だけど、譲れないから」

「私は、フェイトちゃんと話しをしたいだけなんだけど・・・私

が勝ったらただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら、お話聞いてもらえる？」

二人がお互いに武器を構えた

そして、お互いのデバイスを振りかざし当たるって時に現れた

「ストップだ！此処での戦闘は危険すぎる！」

ＫＹ（空気読めない）

「時空管理局執務館、クロノ＝ハラオンだ、詳しい事情を聞かせてもらおうか」

・・・・クソＫＹが、美少女が戦ってる所を邪魔するなんて馬鹿か？馬鹿なのか？

「まずは二人とも引くんだ！このまま戦闘行為を続けるなら・・・」

話しの途中でアルフが魔法をＫＹに撃った、ナイスアルフ！

でも防がれた・・・っち

「フェイト、離れて！」

アルフがそい言うとフェイトは空に跳びアルフはＫＹに魔法を放った

そしてフェイトは空に跳んだ勢いでジュエルシードを掴もうとした・・・っが！ＫＹが魔法を撃って邪魔をした（怒）

「（テメェ！今フェイトに当たっただろうが！捻り潰すぞ！）」

「フェイト！」

ＫＹの魔法がフェイトに当たって落ちるフェイトをアルフがキャッチした、そこにあのＫＹが魔法を撃とうとした所で俺の怒りのボルテージがＭＡＸにたっした

「駄目「テメェ！！！このクソＫＹが！！」め？」

バキッ！

俺はＫＹをおもいっきり殴った

その隙間にフェイト達は去って行った

「いっつ！お前！これは公務失効妨害だぞ！」

「知るかボケ！俺は美と愛の正義の華蝶仮面なんだよ！！そんな俺が美少女が攻撃されるのを黙って見てられる訳ないだろうが！！！」

「あぁ！！もういい！逮捕してやる！」

クロノがこっちに向かってきた

「甘いんだよ！解放（エーミッタム）　雷の斧（ディオス・テュコス）！」

あらかじめ詠唱していた雷の斧（ディオス・テュコス）をクロノ目掛けてぶっ放した

「っな！だぁぁ！！」

KYも頑張ってバリアを貼ったけどすぐに壊れてKYに直撃し気絶した

「女の子をましてや美少女を怪我させたんだ、その罪は思い」

「・・・・・マスター・・・・・キモい」

五月蝿い馬鹿

「あっあの、その子生きてる？」

なのはが聞いてきた

「大丈夫、死ぬような魔法じゃないから・・・・・多分」

怒りに任せて撃ったからなぁ～

「あの！君は「華蝶仮面！」・・・華蝶仮面はなんなの？ジュエルシードを狙ってる訳じゃないんだよね？」

「待ってくれます？その話しはこっちに来てから話してくれませんか？」

KYの母が映像だけど出てきた

「・・・・何で行かないといけないんですか？」

「一応私達は時空管理局なので事情調子を「ごめんなさい、この地球に時空管理局と言う組織はありません、だから行くきはありません」・・・・・駄目？」

いやいや、いくら美人の頼みでも・・・・

「しかたない、行きましょう！」

・・・・ごめんなさい、美人や美少女の頼みを断れる訳がありません

「そっちの女の子も来てくれるかしら？」

「はっはい」

そして俺達はクロノを背負いながらアースラに向かった

―――アースラ

まぁ、ユーノのが人間に戻るイベントがあって今はリンディさんのいる部屋に居る

「そうですか、あのジュエルシードを発掘したのは貴方だったの」

「それで、僕が回収しようと」

「立派だわ」

「だっだけど、どう・・・じに無謀でも・・・ある」

ちなみにさっきクロノは復活した、まぁさっきのダメージ残ってるからフラフラだけどｗｗｗｗ

「・・・・そして貴方は、えぇ～っと華蝶仮面君でいいのかしら？」

「はい、それで」

俺がそう答えると

「きっ貴様！ば・・・・馬鹿にしとるのか！」

フラフラなら喋ってないで寝てなよ

「しかたないだろ、これが名前だもの！」

「なら華蝶仮面君、なんで貴方はあの二人の戦闘に介入してきたの？」

「それは俺が、美と愛の正義の華蝶仮面だから美少女が木の化け物に傷つけられるのがほおっておけなくて」

「そう」

さすが大人の女性だぜ、動揺してない

「あと、貴方が使った魔法ってなんなの？貴方の魔力は勝手だけど調べさせてもらいました、でも貴方の魔力はＢクラスしかなかった、でも貴方が放った魔法からはＡＡＡ＋クラスの魔法だった・・・・・説明してくないかしら」

へ～俺ってBクラスなんだ

「ん～・・・・いやです」

「！・・・何故かしら？」

「なんとなく、です」

「貴様！いい加減にしろ！今逮捕しても構わないんだぞ！」

やっとフラつかなくなってきたな

「いやな物はいやなの、あとさっきも言ったけど此処にあんたらの組織はないの、だから俺逮捕されなぁ～い」

「貴様！そのふざけた仮面ごと潰してやる！」

「フハハハハ、なら潰されたくないので俺は帰るとするよ！じゃね！」

俺はアースラから出ていった

5話（後書き）

仮面付けたあたりからハークの性格が変わってる気がした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6641m/

魔法少女リリカルなのは モルモットから始まります

2010年10月9日07時32分発行